

平安時代における近陵・近墓の被葬者について

藤 木 邦 彦

一 序 説

平安末期以降、中世の貴族社会に行なわれた有職故実書の一つに『簾中抄』があり、その下巻の「山陵」の項に、

「山階 天智天皇 舒明天皇第一子 母皇極天皇

後田原 光仁天皇 天智天皇孫 施基皇子第六子

柏原 桓武天皇 光仁天皇第一子

八島 崇道天皇 光仁天皇第二子

深草 仁明天皇 嵯峨天皇皇子

後田邑 光孝天皇 仁明天皇第三子

後山階 醍醐天皇 宇多天皇第一子

以上天子七廟加三母公三廟都合曰三十陵也」

とみえる。これは、平安後期における近陵・近墓のうちの近陵十所とその被葬者（被葬者）を簡明に示したものである。近陵とは、本来当代の天皇に血縁関係の近い天皇とその母后の山陵を称し、近墓とは同じくその天皇に近い外戚の墳墓をいい、それぞれ血縁関係の遠い祖先

の陵・墓を遠陵・遠墓というのに対する用語である。これら諸陵墓に対しては、毎年十二月諸国からもたらされる当年の調物の初穂を幣物として奉ってその霊を祭る荷前（のきま）（調の荷物から最初にとった部分を奉る意）という儀があり、これには陵墓一般に奉る「常幣」と、近陵・近墓だけに奉る「別貢幣」の二種があつて、前者は各陵墓の預人に托するにとどまるが、後者は特に天皇が建礼門前（初め便殿）に出御御拝ののち公卿以下の使者（荷前使）をたてて贈られることになつていた。然し、のちには儀の重点が著しく後者にかけられ、従つて近陵・近墓だけを単に「荷前奉幣陵墓」とも称されるようになる。^③

また、この荷前奉幣の制は、七世紀末の持統天皇朝に始まると伝えられるが、これは国史の支証を欠き、また『令』には陵霊を祭ることが見え、^④『続日本紀』などで窺い知られる奈良時代には、随時種々の場合における山陵奉幣の事実は見られるにしても、荷前奉幣実施の例は、これを直接には見出だしえない。ようやく九世紀になつて平安初期の『令義解』の記載や『類聚符宣抄』^⑤、^⑥荷にみえる関係諸文書案などによつて、すでにかなり前からその儀が始まっていることを推察す

ることができる。そしてその後の国史・記録類によれば、後述のように、九世紀半ばの清和天皇朝に近陵・近墓の十陵四墓制が成立しているのがみられ、爾来陵墓の加除や墓数の変動があり、多少の弛緩はあったにしても、十二世紀半ばの平安末期まではほぼ実施されていたのであるが、その後は衰退を加え、十四世紀の南北朝時代ごろにはほとんど名目的なものとなり、ついには全く廃絶してしまふ、という、このような変遷をたどるのである。

さて、ここで冒頭に掲げた『簾中抄』の記録に立ちかえていえば、これは、この制度の平安後期における実態と、それがそのまま形骸化されてゆき、ただこの古儀が伝統的に後世に遺されるに至ったという実相を、端的に物語っているといふことができる。しかも、この記録は、そのほかさまざまな注意すべき歴史的意義を内蔵しており、まことに興味深いものがある。

すなわち、先ずこの七天皇のうちの崇道天皇は、早良親王のことで、桓武天皇に次いで皇位を継承する地位にありながら、長岡遷都の際の藤原種継暗殺事件にまきこまれて憤死し、その怨霊を慰めるために桓武天皇によってその山陵を淡路から大和の八島に移され、かつ崇道天皇と追尊された親王である。その陵が平安前期に近陵に列せられて以来、しばしば陵の加除があったにもかかわらず、ついにその地位が動かされなかったことは、その怨霊の祟りを恐れる思想が如何に永く朝廷を支配していたかといふことをよく物語っている。なお、他の六天皇と母后については、その崩日に毎年仏事が行なわれて政治が休まれ

るといふいわゆる国忌^{こき}が併せ置かれていなければならないけれども、崇道天皇に限ってその国忌に政治が休まれないことになっていたといふところにも、この陵だけがきわめて特殊なものであったことがよく示されている。^⑤

次に、最初^⑥の天智天皇は、国家体制を革新して律令国家形成の基礎を定めた天皇であり、特にその後の皇位継承の内規を創定したとみられる天皇であつて、のちわが國中興の祖と仰がれるに至つたのであるから、これを近陵の最初に列し、また世代が如何に降ろうとも、この陵だけは永く近陵の中から除かれぬこととされたのは、当然の成りゆきであつたと考えられる。^⑦なお、天智天皇の功業を補佐し、天皇から初めて藤原の氏名を賜わつてこの氏の始祖となつた藤原鎌足との関係は、特に平安時代に繁栄した藤原氏にとっては忘れることのできない重要な関係であり、この意味からも常に天皇の陵を近陵の中におき、併せて藤原鎌足の墓を近墓の中に列することにしたのは、これまたまことに当然なことであつた。

次に、光仁・桓武・仁明・光孝の四天皇は、奈良末期から平安中期に至る期間の、皇統の二つの変動期に際会した諸天皇であり、これらを直接連結することによって、その後の天皇にとってその直系の歴代祖先を示す最も簡明な皇統譜を成すものとなつていふことに注目したい。いうまでもなく、天武天皇系の称徳天皇の崩御後、天智天皇系の光仁天皇が立ち、しかもその皇子で天武天皇系との因縁を全く絶つた純然たる天智天皇系の桓武天皇がその後を承け、律令国家の恢弘を図り、平安の新政を開かれたわけであるから、この光仁・桓武の両天皇

を天智天皇の次に列していることも不自然でない。また次に、この系統の仁明天皇の皇子文徳天皇から皇孫清和天皇を経て皇曾孫の陽成天皇に至ったとき、二度目の変動がおこり、仁明天皇の皇子光孝天皇が代って皇位につき、爾後その系統が永く皇統を続けることになる。従って後世から見れば、この仁明・光孝の両天皇が桓武天皇のあとに直接続けられて然るべきことになる。

最後に醍醐天皇を列するのは、光孝天皇のあとをうけた父宇多上皇の後見を受けながら展開されたその治世のいわゆる「延喜の治」が後世の天皇政治の模範として仰がれたことにもよるが、また次に述べる藤原氏との関係に特別なものがあつたことも見のがせないと思う。

そもそも嵯峨・淳和及び清和・宇多の四天皇は、唐風政治思想の影響もあつて、崩御に際して自己の国忌・山陵を置くことを辞退する旨遺詔されたから、その陵は敢えて近陵に列せられなかったし、遠陵にさえ列せられていない。実は醍醐天皇も崩御に際して特に薄葬を命ぜられたが、この場合にはその効果がない結果となつた。そしてこののちの諸天皇は、自己の山陵が近陵に入ることによって、以上の諸天皇の陵が近陵から除かれることを恐れ憚り、相次いで山陵を置くことを辞退されたので、爾来近陵中の諸天皇陵はそのまま十陵におけるその地位を固定させられてしまったのである。またここに、当代の天皇に最も血縁の近い天皇や母后の陵であるべき近陵本来の意味が変化して、母后は別として、事実上その皇統において最も重視される天皇の陵だけを意味することになってしまったことを示している。

さらに、右に述べた皇統の二つの変動には、いずれも藤原氏が大きく関与している事実を見のがすことができない。光仁・桓武両天皇の擁立には、式家藤原百川を中心とした藤原氏の策動があつた。すなわち、彼らは称徳天皇の崩御を好機として、始祖藤原氏と関係の深かつた天智天皇系の天皇を立ててその勢威の回復を図つたのであり、当時決して無いではなかつた天武天皇系の候補者を極力排除しながら、光仁天皇の擁立に成功した。然し、その困難さは、初め聖武天皇皇女井上内親王を光仁皇后に立て、その所生の他戸皇子を皇太子に立てることによつて天武天皇系支持派との妥協を図り、のち皇后・皇太子共に廃した上、天武天皇系と全く関係のない桓武天皇擁立の素志を、敢えて光仁天皇にも強請しながら、ようやく貫徹したことに示されている。桓武天皇は皇威確立を企図する反面、藤原氏の功を無視されるわけにもいかず、式家に代る北家の藤原氏はこの間に皇室との縁故を強化しつつ、他氏排斥の伝統的政策によつて、朝廷における覇権の獲得に邁進した。やがて北家藤原良房の権勢をうけついで養子基経は、陽成天皇朝になると、自己の意に副わない実妹の陽成天皇母高子をおさえて自己一門の勢力の分裂を回避すべく、陽成天皇をその乱行を理由に廃したのち、自己幼少のころから馴れ親しみ、その善良な性格を熟知している従兄の光孝天皇を擁立した。その策略は巧妙を極め、自己外孫の貞辰親王や愛婿の貞元親王をも初めから顧ることなく、かつて承和の変に関連して皇太子を廃され、すでに老齡かつ仏門に入つていた恒貞親王に対して形ばかりの要請をしたのち、登極の野心をもつ嵯

峨源氏の源融の発言も一言のもとに制圧し去って、これを強行したのである。表面的には外戚の親に拘泥せず、私心を交えなかったとみられたその行動は当時の人々をも感服させ、後世の『愚管抄』や『神皇正統記』もこれを賞讃しているが、その老獪さはさすがに見事なものであったといえよう。従って光孝天皇の感謝の念は大きく、基経優遇の措置を自発的に考慮され、基経は一般朝臣の反感を買うこともなく、かえってその権勢を所期通り旧時に倍加させた。次いで基経は光孝天皇最愛の皇子ですでに臣列に降下していられた源定省を推して宇多天皇とし、天皇がその恩義にこたえて基経への優遇を重ねられたにもかかわらず、阿衡事件をおこして天皇ならびに他氏の勢力を抑圧するとともに、あらためて新しい皇統に対する外戚政策を再開し、次代以降の権勢維持を予約したのである。

次に、十陵最後に見られる「母公三廟」のことである。わが国の近陵制の模範となった中国の「天子七廟」^①は、母後の廟は含まず帝王の廟ばかりであったが、わが国の近陵ではこれを加えている事實は、古来母系を重視し、母親中心の家族形態がまだ一般に支配的であった^②当時の事情を反映するものであった。従って近陵の数も自然究屈になるし、数の観念も中国と異なるものがあり、敢えて中国の制にこだわらぬ独自の陵制を採用したものと見えよう。ただ光孝天皇の元慶八年以来、母后陵の数を三とし、天皇陵の数を七とするかたちが始まるのは、かえってこのころになって中国の天子七廟の数にこだわるようになったのかもしれない。なお、この母后三廟も、花山天皇の寛和元年以来、歴

代母後の異動があっても、すでにそれらはすべて基経流の摂関家出身の女性に限られ、その墓地は常にその摂関家一門の墓地である宇治の木幡の一所に限られてきたところから、三条天皇朝ごろから「宇治三所」^③の称も行なわれるようになったらしい。そもそもこの宇治木幡の地は、かつて基経が「相三地之宜、永為三門埋骨之處」として以来、「門族骸骨、悉以埋之」とし、のち道長もこの地に淨妙寺を建てて一門の冥福を祈ったほどであった^④。ここにも道長に至ってその繁栄の絶頂に達する基経流藤原氏の発展を思うべきものがあり、この一流の開祖たる基経の歴史的地位の重要性を改めて認めなければならないことであろう。

近陵・近墓については、ひろく山陵ならびに外戚の墳墓にわたり、その祭祀制を含めて多数の論著があるが、管見によれば、最近では所功氏の『西宮記』の逸文と現行文の成立年代——荷前奉幣陵墓の記載を中心として——（『法制史研究』^⑤四二、昭和四八年三月）が注目される。その目的とするところは『西宮記』成立に関する問題であるが、その解明のための有効な手がかりとして近陵・近墓の被葬者の変遷につき、従来の諸研究をふまえて独自の見解を示した点でもすぐれた論考である。また、石塚一石氏の『儀式』批判——荷前条について——（『風俗』^⑥四三、昭和四九年二月）もその目的とするところは『儀式』の信憑性に関する問題であるが、そこにみられる被葬者の問題を含み、荷前の儀一般に関する解明に教ええられること多大である。然し、ここには先ず私自身が現在最も関心

を持つ被葬者の問題のみに限り、主として所氏の所論に則りながら、多少の私見を加えて論述するにとどめておきたいと思う。この論述については、本稿の最後に付する近陵・近墓表を参照しつつ見て頂きたいが、この表も所氏が前掲論文の最後に付された付表に多くのヒントを恵まれたものであり、特記して謝意を表しておきたい。

二 『延喜式』以前

先ず『類聚符宣抄』^四、^{帝王}、^{荷前条所収}、^{天長元年十二月十六日宣}によれば、清和天皇天安二年制定の十陵四墓以前に、淳和天皇天長元年に近陵八所の指定があったことが知られる。これには、山階（天智^{一〇}・^{二二}・^{三三}・^{四四}）、後田原（光仁^二・^{三三}・^{四四}）、大枝（桓武母高野新笠^{延暦八}・^{二二}・^{三三}・^{四四}）、柏原（桓武^{延暦三}・^{二二}・^{三三}・^{四四}）、長岡（平城・嵯峨母藤原乙牟漏^{延暦九}・^{二二}・^{三三}・^{四四}）、後大枝（淳和母藤原旅子^{延暦七}・^{二二}・^{三三}・^{四四}）、楊梅（平城・天長元^{一〇}・^{二二}・^{三三}・^{四四}）、石作（淳和后高志内親王^{大同四}・^{二二}・^{三三}・^{四四}）等の山陵が定められている。ここに「等」とあって特に「八陵」と明記されていないから、他にも何陵かあったかと疑われるかもしれないが、これは当時の文章における用語例からみれば、それにこだわる必要はないので、「八陵」とみて差支えない。

さて、ここに淳和后高志内親王が天皇の母后ではなくて早くもその陵が近陵に入れられているのは、内親王はすでに淳和天皇の親王時代にその妃に配せられ、天皇の第一子恒世親王を生みながら天皇即位前に早くもなくなり、天皇即位後恒世親王も皇太子とされながらこれを固辞したけれども、天皇は特に哀惜して皇后を追贈してこの礼遇を与

えられたためのものである。また同天皇の皇后正子内親王^{元慶元・三}はこのときなお生存中であり、のち一時仁明天皇の皇太子となった恒貞親王の母であったが、承和の変で皇太子が廃せられる不運があり、かつ崩後の際遺令して山陵を置かれなかったから、近陵に列せられなかったし、のちの『延喜式』の遠陵にも列せられていない。なお、嵯峨上皇^{承和九・七}ならびに皇后橘嘉智子^{嘉祥三・五}はこのときまだ在世している。然し、いずれも崩御に際し山陵を置くことを辞退されたから、その陵は近陵に列せられなかった。ただ嘉智子の陵だけは、『延喜式』の遠陵に入っている。これは、仁明天皇の母后であったから、特別の処置がとられたのであろう。

また『延喜式』の遠陵には、天智天皇以後に限って言えば、上述の諸天皇・母后以外では、天武以後称徳に至る諸天皇及び岡宮御宇天皇（草壁皇子）・春日宮天皇（施基皇子）の二追尊天皇、それに聖武母藤原宮子・孝謙母藤原光明子・光仁母紀椽姫・光仁后井上内親王^{宝龜三・三}・^{延暦七}・平城后藤原帶子の諸陵が列せられている。これらはこの淳和天皇朝以前の近陵中に在ったかと思われる陵を多く含んでいることと思う。

最後に、この天長元年度に近墓についての記載がなくて事情不明であることは遺憾である。すでに聖武天皇天平二年^九・^{二五}・^紀に、渤海使の信物を山陵六所に献じたとき、併せて「故太政大臣藤原朝臣（不比等墓）」を祭り、孝謙天皇天平勝宝七年^{二〇}・^紀に、聖武上皇の不予平癒を祈るため山科（天智）・大内東西（天武・持統）・安古（文武）・真弓（草

壁)・奈保山東西(元明・元正)等の山陵とともに「太政大臣(不比等)墓」に奉幣したこともあり、また光仁天皇宝龜九年^{三・二}紀に「勅、淡路親王(淳仁)墓宜_下称_二山陵_一、其先妣当麻氏墓称_二御墓_一、宛_二随近百姓一戸_一守_レ之」とあるように、さらにはのちの『延喜式』の遠墓の中に、鏡女王(藤原鎌足室)・当麻氏(淳仁母)をはじめ、和乙継(高野新笠父)・大枝氏(同母)・藤原良繼(乙牟漏父)・安倍命婦(同母)・藤原武智麻呂(聖武夫人藤原氏父)・藤原百川(帶子父)・藤原諸姉(同母)・橘清友(嘉智子父)・田口氏(同母)及び高市皇子(天武皇子)の諸墓がみられることから逆推して、やはり早くから近墓の待遇も存在し、これらの人々の墓がその中にあったことが想定される。ただ、以上の天長元年度以前の近・遠墓墓については、中には途中で消えた陵墓もあるかもしれないし、いづれにしても国史類に明記を欠くから、一応不詳にしておくほかはない。

次に、清和天皇の天安二年度の十陵四墓制『類聚符宣抄』^四、帝王、荷前条、について考えよう。先ずここに、仁明天皇^{嘉祥三・三}の深草陵と文徳天皇^{天安二・八}の田邑陵はあるが、淳和天皇^{承和七・五}の陵が見えないのは、嵯峨天皇同様、山陵を置くことを停める旨遺詔されたことによるが、またその後も光孝天皇以後は直系の皇統からはずれたこともあって敢えてそのままにされてしまったものであろう。また、清和母(文徳后)藤原明子^{昌泰三・五}はなお生存中であつたし、のち崩じたときは当代と余りにも遠い存在となり、ついにその白河陵は遠陵に列せられるに止まった『延喜式』。これに反して、遡って光仁天皇の父施基皇子(光仁即位

後、田原天皇または春日宮天皇と追尊された)『靈龜二・八』の田原西陵を十陵に入れたことは注目される。天智系の皇統を尊重する趣意に出たものであるが、その契機についてはなお考うべきである。ただその室紀椽姫^{宝龜二・一二}の吉隠陵は、恐らく十陵の数の上から遠陵にとどめられ、『延喜式』にはのち遠陵に移された田原天皇陵とともに遠陵に列せられている。次に近墓は、鎌足の多武峯の墓のほか、藤原冬嗣(文徳母順子の父)^{天長三・七}の後宇治墓、同美都子(同母)^{天長五・五}の次宇治墓、源潔姫(清和母明子の母)^{齊衡三・六}の愛宕墓であつて、詳論はいま省略する。

次に、清和天皇貞観十四年度の改定『三代実録』^{貞観十・四年十二月十三日条}に際し、近陵では高野新笠の陵が除かれて藤原順子(文徳母)^{貞観二・三}の後山科陵が入れられ、近墓では新たに藤原良房(清和母明子の父、基經養父)^{貞観二・四}の後愛宕墓が入れられて、十陵五墓となった。近墓の数については、か
 なるのちまで近陵ほどその数に拘泥しなかったもので、この後も必要に応じて増加されていく。ただその数が近陵十に対して余りにも不均衡となるに至ったとき、その制限が生じてきたことは、のちに見る通りである。

さて、この時点では清和女御藤原多美子^{仁和二・一}と、その父藤原良相^{貞観九・一}のことが問題となる。多美子はこの時点ではまだ生存中であり、しかもその腹に次代の天皇たるべき皇子を生まなかつたから、実は問題にするまでもないが、この父娘は当時発展しつつあつた基經の有力な対抗馬であつたから、その不運を感じざるをえない。と同時に

に、藤原高子（文憲后・陽成母）延喜二〇・三・二四册も基経の実妹でありながら、

基経の意に副わず、口実を設けてわが子陽成天皇の退位を強行された上、のち自ら東光寺僧との密通事件をおこして皇太后の地位を奪われ寛平九・二・二二、その崩後その地位を復された天慶六・五・二六ものの、ついに近陵にも遠陵にも列せられずに終り、陽成上皇天曆三・九も讓位後の生活態度がまた非難的となって母后同様近陵・遠陵に列せられずに終った。結局は、基経の老獪な政策の犠牲となり、光孝天皇系のその後の天皇ならびに基経流の藤原一族に白眼視された結果と断ぜざるをえない。陽成上皇の後宮にあった綏子内親王（光孝皇女）延喜三・四・二五・姉子（好子）女王（光孝孫女）嘉年不詳、藤原遠長連永か道長かともいわれる女嘉年不詳らもまた上皇と運命を共にしたことになるばかりか、陽成天皇皇弟貞保親王（高子の所生）・貞辰親王（基経女佳珠子の所生）らとその母たちの運命も同様になってしまった。

なお、このころ成立したといわれる『儀式』（『貞観儀式』）の現行本の記事同書一〇・奉山陵幣儀条には、この十陵のうちに藤原乙牟漏陵を欠き五墓のうちに藤原良房墓を欠いている。これは石塚一石氏が説かれるように、単なる筆写の際の脱落とはみられず、現行本『貞観儀式』が『延喜式』成立後にそれらしくよそおって作成されたもので、従ってその記載には信頼できないものが多く、これをそのまま当時のものとして参考にすることはできない。^⑩

次いで陽成天皇元慶元年度の改定『三代実録』元慶元・二二・二三条では、正確に近陵五所を列記するとともに、近墓に母后高子の両親藤原長良齊衡三・七・三・乙春

元慶七・四・二二の墓（乙春墓は深草墓であるが、長良墓の墓名は不詳）が、これまでの冬嗣・美都子の墓を遠墓に移したのに代えて列せられているのは、当然のことであり、また長良・乙春が基経の両親でもあったからきわめて円滑にこの加除が行なわれたことであろう。然しながら、この場合長良はすでになくなっていたから差支えないが、乙春の方はまだ存命中であつたとみられるから、この記事は右の事実と矛盾する。^⑪恐らくこの変更は彼女がなくなったのちの元慶七年十二月に至って完成したものとみられ、『三代実録』はこれを一括して記事にしまったものであろう。もし然りとすれば、冬嗣・美都子の墓も二回にわたって一つずつ除かれたものと考えられる。

また、この改定のころ元慶四・二二・四、清和天皇が崩ぜられたが、遺詔により山陵を置かせられなかったから、その陵は近陵にも遠陵にも列せられることなくて終った。

次に、光孝天皇元慶八年度の改定『三代実録』元慶八・二二・二〇条は、その十陵五墓を列記していて問題はない。田原天皇陵及び良房・潔姫両墓が除かれて遠陵・遠墓に移され、代りに光孝天皇の母で仁明女御（贈皇太后）の藤原沢子承和三・六・三・の中尾陵及びその父藤原総継元慶八・三・月以前の拝志墓と母同数子同・三・月以前の八坂墓とが近陵・近墓に入れられた。総継・数子は基経母乙春の両親でもあり（乙春は沢子の妹）、この加除もきわめて自然に行なわれたことと思われる。

次いで、宇多天皇仁和三年年度の改定^⑫では、平城天皇陵が除かれて遠陵に移され、光孝天皇仁和三・八・二六の後田邑陵が近陵に列せられた。一方

近墓では、宇多天皇母班子女王の父仲野親王（桓武皇子、母は京家藤原大繼女河子）^{貞観九・正一七歳}の高昌墓と同母当宗氏^{不詳}の河島墓が新たに入れられた。また、このとき早くも藤原総継・数子の両墓が除かれ、良房・潔姫の両墓が近墓内に復活したと、所氏は推定されている。宇多天皇朝となつては前代と違つて外戚の意味は薄れたから総継・数子を除き、むしろ基経の養父母の良房・潔姫を重視されたからとみられるからである。これも道理あることなので、一概にこれを否定し去るつもりはない。然し、これは基経実母の両親と基経の養父母との入替えということであり、それが果して基経の意に適用ものであつたかどうか疑わしい。母方の親を大切する感情の強かつたこの時代、血縁の親疎ということを考えると、天皇と基経との関係がまだ悪化していなかつたこの時点ではまだむずかしかつたもののように思う。むしろこの入替えを基経薨後に引き下げた方がよいように考える。なお、これがのちの『延喜式』^{諸説寮式}の近陵・近墓の記載に関係があるようにも考えるので、なおしばらく疑いを残しておきたい。

次に、宇多天皇寛平三年度の改定『日本紀略』^{寛平三・三・一二・一六条}では、藤原基経^{寛平三・三・一二・一六条}の次宇治墓が近墓に入れられた變動のみであるが、これで近陵・近墓は十陵八墓となつた。基経は宇多天皇女御温子^{延喜七・六・七}の父であり、温子の所生は皇女のみであつたが、まだ皇子出生の望みを残していたし（ついに皇子を生まなかつたが）、またその女佳美子をすでに光孝天皇女御としていて（これまた皇子を生まなかつたが）、宇多天皇の准母の父とも考えられていたことでもあり、かつ何よりも光孝・宇多

両天皇擁立と兩朝執政の功を特に嘉みせられて、早くも近墓に列せられたのであろう。なお、温子は醍醐天皇から継母養母としての尊敬をうけ、寛平九年皇太夫人とされていたから、崩後その後深草陵は近陵ではないが遠陵に入れられ、基経墓の近墓内の地位もここに安定した感がある。なお、温子とは対照的なのは先にも一寸触れた宇多母班子女王（光孝女御、のち皇太后）^{昌泰三・四・一册}である。彼女はこの時まだ生存中であるから問題はない。然し、その両親の仲野親王・当宗氏がすでに近墓に列せられていたにもかかわらず、やがて彼女が崩してもその陵は近陵にも遠陵にも列せられなかつたようである。このことは恐らく彼女が母後の權威をもつて、基経の女穩子を兄時平が基経の遺志をうけて醍醐天皇の後宮に入れようとしたとき、これを強硬に拒否した（然し結局、時平は策を設けこれを実現してしまつたが）ことに対する時平らの反感を買つたためであらう。班子女王が穩子の入内を峻拒したのは、一つには彼女が皇親としてまた京家藤原氏の縁者として早くから基経に対する反感もあつたろうが、直接的には彼女が自己所生の為子内親王（宇多皇女）^{昌泰二・三・一四歳}をかつての皇太子（醍醐天皇）妃としており、即位後もその地位を続けさせていたためであり、また為子内親王が出産のために薨じたことも、穩子の母の祟りとみて終始拒否していたからである。為子内親王もこうして皇子を得ずしてなくなり、近陵にも遠陵にも列せられずに終つた。

次に醍醐天皇寛平九年年度の改定『日本紀略』^{寛平九・一二・八条}では、近陵で藤原順子陵を除いて遠陵に入れ、代りに醍醐天皇の母藤原胤子（宇多女御、の

ち贈皇太后)・寛平八・六の小野陵が近陵に入れられ、昌泰三年には、近墓では藤原乙春墓が除かれて遠墓に入れられ、代りに藤原高藤(胤子の父)・昌泰三・三の小野墓が近墓に入れられたものとみられる。さらに同天皇延喜七年度『西宮記』六、荷前条では同年一・二・五、裏書では一・二・二一には、近墓で藤原長良墓が除かれ、代りに宮道列子(胤子の母)・延喜七・一〇の後小野墓が入ることになった。

三 『延喜式』以後

やがて醍醐天皇延長七年十二月二十六日に『延喜式』が完成する。

これによって当時の近陵・近墓の制が最もよく判明するわけであるが、その十陵八墓の内容については、不思議なことに中務省の式と諸陵寮の式とは相違する。「中務省式」では、前回の延喜七年十二月に改定された状態のままに記されているが、「諸陵寮式」では、近陵十陵・近墓八墓とともに遠陵六十三陵・遠墓三十九墓を全部表示して詳細ではあるものの、近墓で藤原良房・源潔姫夫妻の墓の代りに藤原総継・同数子夫妻の墓を入れている。これについて所氏は、「諸陵寮式」は、「原史料となった陵墓名表をそのまま引き写しているらしいのに対して」、「中務式」の方は、『延喜式』編纂当時、毎年実際に荷前奉幣が行なわれていた陵墓を記載したものとみてよいであろう」とされている。如何にもその通りであるかもしれない。然し、次のようなことも考えられようか。すなわち、仁明天皇から直接系統を引く新皇統となった光孝天皇の地位、ならびに藤原氏の方でもこの革新をなしと

げた藤原基経の地位が当時なお大きく意識されており、その外祖母である総継・数子の墓の方が、かなり縁の遠くなった良房・潔姫の墓よりも重視される傾向が強く残っていたために、直接陵墓を管理する諸陵寮でこの錯誤が生じ、両者の食い違いとなって現われたのではあるまいか。或いは、宇多天皇仁和三年度に早くも良房・潔姫の両墓と入替えられたと想定されている総継・数子の両墓がそのまま残されていて、延喜の「中務省式」制定のころになって急にその入替えが実施されたのではないかと考えられる。

また、「諸陵寮式」の遠墓の中に、かつて近墓の中にあった長良墓が見当たらない(同じくかつてあった乙春墓はあるにもかかわらず)のは不可解で、吉永巖氏は「転写の際、目移などの事情で脱落したのではないだろうか」と推測していられるが、所氏は「にわかには納得しがたい」としていられる。如何にも今後なおよく考えてみなければならぬことだが、長良墓と乙春墓は同時に近陵から遠陵に移されたのではなく、前述のように二回にわたっての移動であったのだから、或いは所氏が推定された昌泰三年の入替えの際の近陵簿と、その前回の寛平九年度の遠陵簿が誤って一つに併され、これが「諸陵寮式」の近・遠陵墓簿として掲載されてしまったための誤りであるかもしれない。この際、前述の良房・潔姫も遠墓の方に入っているから、寛平九年度及び昌泰三年度でもまだ遠墓の中に残っていた可能性があり、その後「中務省式」成立の段階またはそれに近い時点でようやく入替えが実現されたのではないかと考えるわけである。然し、まだよく考えて

みる必要があり、現在のところ疑いを存しておくにとどめる。

また、この時点で基経の長子藤原時平^{延喜九・四薨}の又宇治墓が遠陵に入れたが、^{『延喜式』}それは彼の女仁善子が醍醐天皇の第一皇子保明親王の妃となり、保明親王は皇太子のまま薨じたが、仁善子所生の慶頼王が代って皇太子となった(王もまたやがて薨じたが)ことと、基経の遺功と彼時平自身の執政の功に報いるためのものであったとみられる。

また、もう一つ注意しておかなければならないことは、多武峯墓のことである。従来多武峯の被葬者を、天安二年度の『三代実録』の記事が明記する通りに、その後引続いて藤原鎌足とみてきたが、これは『延喜式』^{諸陵寮}の内閣文庫本の注記が同様に行っていることにも支えられてのことでもある。然るに『延喜式』^寮の記事自体の割注にはこれを不比等とし、以後『政事要略』以来同じく不比等とするようになっていいる。これによると、貞観以後、鎌足から不比等への変化があったようであるが、元来両者共にその墓は多武峯にあつて共に多武峯墓と表現されるから、その区別や変動は甚だ微妙であつて、これを明確にし難い。然し、不比等も律令制定に大功があり、奈良時代すでに不比等墓が朝廷から特に祭られている事実は前に見た通りであり、また皇室の外戚としては藤原氏最初の人物であるから、藤原氏の皇室の外戚たる地位がいよいよ決定的に強くなってきたこのころにおいて、鎌足から不比等に祭祀の対象が変化することも考えられることである。然し、所氏同様、疑問を残しながらしばらくなお鎌足としておいて、

後考に譲りたい。

朱雀天皇朝では、近陵で文徳天皇陵を除いて醍醐天皇^{延長八・九の崩}の後山科陵を入れ、近墓では源潔姫を除いて藤原基経室(嵯峨天皇皇子忠良親王女)か操子女王^{寛平・二の墓}を入れた^{『政事要略』二九、荷前条所収、延長八・一。二・九太政官符『別聚符宣抄』も同じ。}ここに近陵では、文徳天皇陵が除かれたので、いよいよ仁明天皇より光孝天皇へ直接続く新皇統譜が明瞭になってきたように思われ、かつこれから円融・花山両朝へかけて、近墓でも、この新皇統と深い関係をもつ基経流の家系が重きをなしていくように思われる。

村上天皇朝では、近墓で基経の子藤原忠平^{天曆三・八の墓}が入つて十陵九墓となる。忠平墓が入れられたのは、その女貴子が醍醐天皇最初の皇太子保明親王の御息所となり、その所生に皇子はなかったものの、やはり摂関の功による特別の優遇措置であつたのであろう。近陵では、藤原沢子の陵が除かれて、朱雀・村上天皇の母(基経の女で醍醐天皇中宮、のち皇太后・太皇太后)穩子^{天曆八・四の崩}が入れられ、またやがて藤原乙牟漏の陵が除かれて、冷泉・円融両天皇の母(師輔の女で村上天皇皇后)安子^{康保元・四の崩}の陵が入るが、安子は早くなつてまだ天皇の母たるに至らず、生前は皇太子の母にすぎなかつたのに、その陵を早くも近陵に加えたのは、天皇の愛寵と外戚藤原氏の権勢を示すものであつた。ただ安子の父藤原師輔^{天徳四・五の薨}が近墓に入らなかつたのは、早く薨じて天皇の外戚たり得ず、摂関でもなかつたことによるものである。

円融・花山両天皇朝のうちに、近陵では、藤原胤子の陵が除かれて、

花山天皇母（伊尹の女で、冷泉天皇女御、のち贈皇太后）懷子^{天延三・三崩}が入る。この間、朱雀天皇女御瀬子女王（保明親王女、藤原仁善子の所生）^{天曆四・五・五崩}は昌子内親王のみを生んで終ったし、その昌子内親王^{長保元・一・一崩}も冷泉天皇皇后（のち皇太后・太皇太后）となったが皇子なくして終ったから、その墓はいずれも近陵に列せられなかった。このほか円融天皇皇后嬪子（兼通女）^{天元二・一・一崩}、同遵子（頼忠女）^{寛仁元・一・一崩}、花山天皇女御祇子（為光女）^{寛和元・七・一八崩}も所生の皇子がなかったから、同様の運命に終った。なお、一条天皇母（兼家の女で、円融天皇女御、のち皇太后）で女院の例を開いた詮子^{長保三・間一・二・二崩}は、遺令によって国忌・山陵は置かれなかった。『扶桑略記』長保三・間一・二・二条。

近墓では、円融天皇朝に藤原実頼^{天禄元・五・一・一崩}、花山天皇朝に藤原伊尹^{天禄三・一・一崩}が入れられたとみられる『政事要略』^{二・荷前条}。そしてここに近陵・近墓は十陵十一墓となってしまう。伊尹はその女懷子が花山天皇母となったから当然だが、実頼は女慶子^{天曆五・一・一崩}を朱雀天皇の、また女述子^{天曆元・一・一崩}を村上天皇の女御としながら、いずれも外孫の天皇を得なかったから、本来は入れる必要はないが、かつての基経忠平の場合同様、摂関の功勞に報いる殊遇であったのにちがいない。もっとも、このようになると、近陵は十陵に限られているのに、近墓は殖え過ぎて不均衡となるので、これを制限する意向が出始めたことを、『政事要略』が伝えている。

さて、ここで近陵十陵の内容がこのころほぼ固定してきたことを注意しておかなければならない。このことは、さきに序説にも触れたこ

とだが、朱雀天皇（崩当時は上皇）^{天曆六・八・一五崩}及び村上天皇^{康保四・五・一・一崩}は、いずれも遺詔して国忌・山陵を置くことを停められた。『扶桑略記』天曆六・四・拾遺雜抄・下、『小野宮年中行事』五・二五条。これは唐風政治思想による先例になられたことによるものであるが、また恐らく、自己の陵が十陵の中に入れられることによって、すでに十陵内に列せられている諸天皇の陵が除かれることを恐れ憚られたものと考えられる。従ってその後の歴代諸天皇もこれにならわれ、それも特に醍醐天皇とならんで聖帝と謳われた村上天皇の先例が大きかったものと思うが、ともかくも十陵内の醍醐天皇までの七天皇陵はこれから永く固定してしまうことになる。従ってまた十陵内の母后三陵の数もこれによって固定するようになる。またその三陵は、前にも述べたように、藤原摂関家出身の女性となってきたので、その陵はすべて藤原一門の墓所となった宇治木幡の墓所にあるようになり、ここに「宇治三陵」、また「宇治三所」の称も現われるようになった。この称呼の由来の考証については、前引の所氏の所論があるので、ここにはそれに譲ることにするが、ともかく爾後の母后三陵の入替は、この範囲内で行なわれることになってしまっている。

すなわち、次の三条天皇朝には『日本紀略』寛弘八・一二・二七条、天天皇母（兼家の女で、冷泉女御、のち贈皇太后）の超子^{天元五・正・二八崩}、また次の後冷泉天皇朝には『中右記』寛徳二・三・一三条、超子の陵を除いて、後冷泉天皇母（道長の女で、後朱雀天皇東宮時代の妃、のち贈皇太后）の嬉子^{万寿二・五・五崩}の陵を加えた。次いで白河天皇朝には『百鍊抄』承保二・五・二四條、嬉子の陵を

除いて、白河天皇母（公成の女で、後三条天皇女御、のち贈皇太后）の茂子・康平五・六の陵を加え、鳥羽天皇朝には『殿曆』天仁、元・七・七条、穩子の陵を除いて、鳥羽天皇母（実季の女で、堀河天皇女御、のち贈皇太后）の茂子（苺子）康和五・正・二五崩の陵を加え、さらに二条天皇朝には『師光年中行事』平、治元・六・二四條、安子の陵を除いて、二条天皇母（経実の女で、後白河天皇東宮時代の妃、のち贈皇太后）の懿子・康治二・六・二四崩の陵を加えたことが知られる。

なおこの間、後朱雀・後冷泉両天皇母（道長の女で、一条天皇中宮）の彰子・承保元・一・三崩は、余りにも遅く崩じたため、当代の天皇に縁が遠くなつたためか、ついに近陵に列せられずに終つたようである。また、一条天皇皇后定子・長保二・一・二五崩は敦康親王を生み、三条天皇皇后娥子（娥子）万壽二・三・二五崩は敦明親王を生んだが、いずれも道長の権勢に圧せられて親王の即位はみられなかったから、その機会を失つてしまふ不運に終つた。このほか、三条天皇中宮（道長女）妍子・万壽四・九・一四崩・後一条天皇中宮（道長女）威子・長元九・六・八崩・後冷泉天皇皇后（頼通女）寛子・大治二・八・一四崩・同皇后（教通女）歆子・康和四・八・一七崩はいずれも所生の皇子なくして同じく近陵に列せられる機会を失つた。以下は煩雑を恐れて省略することとする。

また、三条天皇朝以後、当然近墓の変遷もあつたに違いないが、これについては史料の徴すべきものがなく、知り難い。ただ、『西宮記』（現行本）一・二にある記事は、恐らく後人の追記にかかるものらしく、かつ記事甚だ疑わしくして採るに足らない。

ただ、『朝野群載』二所載の崇徳天皇天治二年十二月日付荷前物請文は、当時の山陵を七十七処とし、墓三十六処と記しており、うち近

陵はもちろん十陵としてゐるが、近墓に奉る幣物は諸陵寮の責任ではないからその数を記していない。然し、これによって平安末期の陵墓数をほぼ知ることができる。『延喜式』制定のころに比して、陵墓数全体としてかえつて減少の様相を示しており、制度の衰退を否むことができない。

なお、荷前儀衰退の兆は荷前使の欠怠の現象にもよく現れている。それはすでに平安初期から始まつてゐるようだが『類聚符宣抄』四、荷前所収、弘治四・正・七、承和二・二二・九付、平安中期には著しいものになつてゐる『九条殿記』荷前事、天曆元・朝延はしばしばその振肅に努めてはゐるが、公卿・官人の怠惰は、この荷前使に限らず、すでに一般的に救い難い事態になつてきていた。近陵・近墓制が如何に表面的には励行されても、その衰退は早くも予見される状態になつていたのである。

最後に、室町時代の『拾芥抄』下・三、十陵部には、鳥羽天皇天仁元年度のものともみられる十陵を掲げ、九墓も付記しているが、九墓の方は村上天皇康和元年度のものともみられるものを載せてゐるに過ぎず、終りにその荷前使の資格について記し、また十陵九墓は時に随つてこれを廃置することやその慣例を簡単に記載するとともに、「然而近代廢之」と結んでいることは、当時の公卿の常識とされる程度を推察することができ、すでに近陵・近墓の制が廃絶して、まったく往時のものとなつてしまつてゐたことを知ることができる。

四 結 言

これを要するに、この近陵・近墓制は、もちろん国家の公的制度であつたとはいへ、藤原政権の盛衰と相伴う推移をたどつたものであり、いわば藤原政権の記念碑的存在となりおわたつたものと、私は認めざるをえないのである。

注① 『改定史籍集覧』廿三所収、貴族の宮廷生活上必要な事項を記録した一種の備忘録。平安末期に一応成立し、以後南北朝ごろまでの書き継ぎがある。

② 荷前の儀については、『延喜式』・『儀式』・『西宮記』・『北山抄』・『江家次第』等の有職故実書に詳しい。

③ 『皇年代略記』持統条「荷前事初此代云々。」

④ 『令義解』職員令諸陵司条「正一人。掌祭陵靈。」の割注に「謂。十二月奉荷前幣是也。」諸陵司は天平元・八・五諸陵寮と改む。

⑤ 『江家次第抄』三、国忌条「為謝其怨靈准国忌非廢務之例。」

⑥ 『延喜式』諸陵寮によれば、同様に冤死した桓武天皇皇子伊予親王とその母藤原吉子の両墓が遠陵に列せられている。彼らが早良親王と共に御霊会や御霊社の祭神の中にあることも、特記の措置であつたことが知られる。

⑦ 『江家次第抄』国忌条に、天智天皇を太祖と称し、「爾来至今皆天智之一流、而為太祖不遷之廟、豈不可乎。」とする。

⑧ 嵯峨天皇―『続日本後紀』承和九・七・一五、淳和天皇―同、承和七・五・八、清和天皇―『三代実録』元慶四・一二・四、宇多天皇―『扶桑略記』承平元・七・一九条。

⑨ 山口博士「陽成帝の退位をめぐる」(『日本歴史』二二九)・角田文衛氏「陽成天皇の退位」(同氏著『王朝の映像』所収)。

⑩ 光孝・宇多両天皇の擁立について、角田文衛氏は、基経の異母妹で当時

後宮を支配していた藤原淑子との協力ないし妥協があつたことを推察されている(同氏前掲論文及び同氏著『紫式部とその時代』所収「尚侍藤原淑子」)。

⑪ 『続日本紀』延暦一〇・三・二三条「太政官奏言。謹案礼記曰、天子七廟、三昭三穆与太祖之廟而七。」

⑫ 高群逸枝氏「招婿婚の研究」。なお、角田文衛氏『日本の後宮』(昭四八)はすぐれた大著で、この近陵・近墓の問題を考える上にも不可欠の文献である。

⑬ のち、近墓の方も女性三に限定するかたちとなるのは、近陵のそれに合わせたものであらう。

⑭ 「宇治三所」(宇治三陵)については、所功氏、前掲論文参照。

⑮ 『政事要略』所収「木幡寺鐘銘并序」・「木幡寺呪願文」及び同書二九荷前条。堅田修氏「藤原道長の淨妙寺について」(『撰問時代史の研究』所収)。

⑯ 江戸時代に本居宣長の『古事記伝』二〇の所説ほか関係文献(宮内庁書陵部編『圖書寮典籍解題―統歴史編』五陵墓部にその文献多数を挙げている、明治時代では、神宮司庁編『古事類苑帝王部山陵の項、徳川家編『大日本史』志(礼案部、歴代山陵、山陵)荷前幣の項がその主要のものであるが、大正時代には鎌田正憲氏「十陵四墓の研究」(『国学院雑誌』二八・一六)、同氏「荷前幣制度の研究」(『国学院雑誌』二九・一二)、昭和初年には和田軍一氏「諸陵式に関する二三の考察」(『歴史地理』五一・一・三四)・同氏「諸陵寮式の研究」(『歴史地理』五三・二・三四)、戦後では吉永巖氏「諸陵寮式の成立事情その他」(『関西大学東西学術研究所紀要』一所収、時野谷滋氏「神武天皇と諸儀式」(『神武天皇と諸儀式』所収)、荷前と関係深い国忌については、中村一郎氏「国忌の廃置について」(『書陵部紀要』二所収、葬制一般については中山薫氏「奈良平安初期における葬制についての一考察」(『岡山民俗』百号記念特集号所載)、北垣聡一郎氏「諸陵寮式の近陵近墓制について」(『伝承文化研究』四)、田中久夫氏「陵墓祭祀の風習について」(『近畿民俗』四七)等、最近では本文に記した所功氏及び石塚一石氏の論説が主要なも

のであろう。

①⑦ 『類聚符宣抄』四、荷前条「右大臣宣、奉勅、山階、後田原、大枝、柏原、長岡、後大枝、楊梅、石作等山陵献荷前使、宣差参議以上、若非参議、用三位以上、立為恒例。天長元年十二月十六日 大外記宮原宿祢村継奉」。

①⑧ 帶子は所生の皇子なく、ただ父藤原百川の余威によつたものと思われ、これに対し、平城天皇皇太子時代の妃で高岳親王を生んだ伊勢継子は、親王のち皇太子を廃されたから、母后の地位を得ることなく終った。

①⑨ 石塚氏前掲論文参照。

②① 『菅家文章』一二所収の元慶八年四月十日「為藤太夫先妣追福願文」によると、乙春は元慶七年四月二二日になくなったようである。角田文衛氏「藤原高子の生涯」(同氏著『王朝の映像』所収)参照。

②② 所氏の推定による。

②③ 仲野親王室当宗氏については、『日本紀略』仁和三・閏一一・一五条には「当麻氏」とするが、同書寛平元・一一・一九条や、『延喜式』諸陵寮遠墓のその墓「河島墓」には「当宗氏」とする。『宇多天皇御記』寛平元・四・一四條(年中行事秘抄等所引)には「朕之外祖母当宗氏神在河内国、自今年可祭始之状仰畢」とあるから、やはり「当宗氏」とすべきであろう。「当宗氏」は『新撰姓氏錄』のいわゆる諸蕃に属する。桓武天皇母高野新笠が諸蕃の家の出身であったことと考へ併せて注目値する。

②④ 和田英松氏・角田文衛氏は、佳美子は基経の女と推定されている。和田氏「藤原基経の廃立」(『中央史壇』二五)・角田氏前掲「陽成天皇の退位」。

②⑤ 『日本紀略』延喜七・六・七条「天皇之繼母又養母也。」

②⑥ 延長八・一二・九改定の近墓に加えられた墓「一所正一位王氏」を『江家次第』一一荷前条に「班子女王」と注し、以下これに従う諸書が多いが、これは明らかに「操子女王」の誤りであることは、鎌田氏・所氏の説く通りである。

②⑦ 『九曆逸文』天曆四・六・一五条に「延喜(醍醐)天皇始加元服之夜、東院后(班子)御女妃内親王(為子)并今太皇太后(藤原穩子)共欲参入而法皇(宇多)承母后(班子)之命、被停中宮(穩子)之参入也、其後彼妃内親王不幾而依産而薨、其時彼東院后宮聞浮説云、依中宮母氏(入康親王)之冤靈有云云、因之重可被停中宮之参入云々、而故贈太政大臣時平左右廻令参入也、法皇雖有怒氣、事已成也、不能退給」とある。宇多法皇・班子女王と時平一族との対立的情勢をよく示している。なお、班子の墓は葛野郡頭陀寺付近にあるという。

②⑧ 所氏の推定通りであらう。

②⑨ 前註①⑥中の吉永氏論文。

②⑩ 『九曆』天曆三・一一・二三条「以貞信公(忠平)墓所可預荷前幣之由、蒙仰了、可令作官符之由、仰有相朝臣事。」また『政事要略』二九にも「新加太政大臣正一位藤原氏、在宇治郡」とある。

②⑪ 当時皇室でも藤原氏にとつても重要な地位にあった穩子の崩御であるから、当然早く十陵に列すべきであったが、代りに除くべき陵の選定に苦しみ、『西宮記』一四裏書勘物によると、天曆八年十二月十五日、山陵国忌廃についての勘申と二帝以上の生母の山陵についての勘申が奏上され、同十六日、平城・嵯峨兩帝の母乙牟漏の陵は如何にも除き難く、ついにやむなく沢子の陵が除かれることに決した。

②⑫ 『政事要略』二九所引「康保元年十二月四日太政官符」に、安子の山陵を山城国宇治郡栗栖郷木幡村におくことを定めている。『日本紀略』康保元・一二・二二条に「荷前止長岡陵(加先皇(この箇所欠字あり)陵)」とあり、この陵は穩子の陵であるようだが、いずれにしても安子の陵が乙牟漏の陵に代つて入れられることになったようである。

②⑬ 『日本紀略』寛和元・四・二条に、六月晦日贈皇后(胤子)の国忌を除くことが仰せ出され、代つて懷子の国忌が入れられたことがみえる。そこで、この年十二月ごろ胤子の小野陵を除き、懷子の後宇治陵が加えられたらう

るのは当らない。

(本学教授・国史学)

と、所氏は推定し、かつここに十陵のうちの「七天皇以外は全て基経流の撰関家出身者が占めることになった」とされるのは、正しい見方である。

③③ ここに実頼・伊尹が加わったことを記し、「今案、有_二新加墓_一之時、如_レ陵不_レ除_二先墓_一歟、又堀川相府兼通、可_レ入_二歟、可_二尋知_一。」としているのは、これを反映するものである。

③④ 『日本紀略』寛弘八・一二・二七条に「詔、追_二尊皇妣女御從四位上藤原朝臣超子_一、贈_二皇太后_一、置_二国忌山陵_一。」とある。『小右記』・『権記』によれば、この年十二月二十七日に国忌を置き、荷前に預る旨が審議され、ただその代りに何陵を除くべきかが問題となり、「停_二贈皇太后_一（懷子）今宇治陵云々。山陵廢置事、以_二昭穆漸遠_一停_レ之。今生_二二帝_一之者不_レ停云々。然而華山母（懷子）者、於_二當今_一為_二嫡母_一、是_二二等也、先太皇太后（穩子）者、承平（朱雀）天曆（村上）母后、右二帝之母陵、不_レ能_レ廢_レ之、然昭穆漸近在、可_二議定_一。」（『権記』）とされ、結局当代との等親の遠近よりも二帝の生母たる事実が重んぜられて、かねて左大臣道長が内示したように、懷子の陵が除かれることに決した。

③⑤ 十陵として「天智 桓武 深草 小松 醍醐 東院后 贈皇后（割注して「醍醐母」とする）村上母 院母 華山母」、次に九墓（割注して「今十三」と記す）として「不比等 白川 堀川 房継 小松祖 中野親王（東院と細字で注する）東院后父 小一条 小野宮 一条 又堀川」、そして別行に「三条 高殿」とする。このうち「東院后」は班子女王、「院母」は円融院母安子であろう。「深草」は仁明、「小松」は光孝、「白川」は良房、「堀川」は基経、「房継」は総継であることは明らかだが、「小松祖」は総継の注記であって総継一人にしほるべく、また「東院后父」は仲野親王の注記で、ここも仲野親王一人にしほるべきである。「小一条」は忠平（または高藤）、「小野宮」は実頼、「一条」は伊尹、「又堀川」は兼通であろうが、こうすると都合九となり、標記の通り「九墓」で差支えない。これに別行の二人（これはなお問題としたい）を入れても十一となり、「今十三」と注記してい

近 陵・近 墓 表 (○ハ男性, ●ハ女性, ◎・●ハソノ)
(初出ノモノ, ×ハ次段デ消エルモノ)

陵 墓 数		近	陵	近	墓
年月日	天皇				
典拠	執政				
八 陵 ? 墓		◎天智	◎高志内親王		
824 天長元 12.16	淳和 冬嗣	◎光仁 天皇	◎平城 天皇		
		◎高野 新笠 桓 武 母	◎藤原 旅子 淳 和 母		
		◎桓武 天皇	◎藤原乙牟漏 平城嵯峨母		
類聚符宣抄			×		
十 陵 四 墓		◎天智	◎文德 天皇	◎源 潔姫	
858 天安2 12.9	清和 良房	◎田原 天皇	◎仁明 天皇	◎藤原美都子 清和外祖母	
		◎光仁 天皇	◎崇道 天皇	◎藤原冬嗣 文德外祖母	
		◎高野 新笠	◎藤原乙牟漏	◎藤原鎌足	
三代実録 類聚符宣抄		◎桓武 天皇	◎平城 天皇		
		×			
十 陵 五 墓		◎天智	◎藤原 順子 文德母	◎藤原 良房 清和外祖父	
872 貞観14 12.13	清和 基經	◎田原 天皇	◎文德 天皇	◎源 潔姫	
		◎光仁 天皇	◎仁明 天皇	◎藤原美都子	
		◎桓武 天皇	◎崇道 天皇	◎藤原冬嗣	
三代実録		◎藤原乙牟漏	◎平城 天皇	◎藤原鎌足(不比等?)	
		×		×	

陵墓数					
年月日	天皇	近 陵		近 墓	
典拠	執政				
十陵五墓		○天智 天皇 ○田原 天皇 ○光仁 天皇 ○桓武 天皇 ●藤原乙牟漏 天皇 ○崇道 天皇 ○平城 天皇 ○仁明 天皇 ○文徳 天皇 ●藤原 順子		○藤原 乙春 陽成外祖母 ●藤原 長良 陽成外祖父 ○藤原 良房 ●源 潔姫 ○藤原 鎌足(不比等?)	
877 元慶元 12.13	陽成	×		×	
883 元慶7 12.?	基経				
三代実録		×		×	
十陵五墓		○天智 天皇 ○光仁 天皇 ○桓武 天皇 ●藤原乙牟漏 天皇 ○崇道 天皇 ○平城 天皇 ○仁明 天皇 ○文徳 天皇 ●藤原 順子		○藤原 数子 光孝外祖母 ●藤原 総繼 光孝外祖父 ○藤原 乙春 ●藤原 長良 ○藤原 鎌足(不比等?)	
884 元慶8 12.20	光孝	×		×	
	基経				
三代実録		×		×	
十陵七墓		○天智 天皇 ○光仁 天皇 ○桓武 天皇 ●藤原乙牟漏 天皇 ○崇道 天皇 ○仁明 天皇 ○文徳 天皇 ●藤原 順子 ●藤原 沢子 ○光孝 天皇		○藤原 鎌足(不比等?) ○藤原 長良 ●藤原 乙春 ○藤原 良房 ●源 潔姫 ○仲野 親王 宇多外祖父 ●当宗 氏 宇多外祖母	
887 仁和3 12.?	宇多				
	基経				
(推 定)					
十陵八墓		○天智 天皇 ○光仁 天皇 ○桓武 天皇 ●藤原乙牟漏 天皇 ○崇道 天皇 ○仁明 天皇 ○文徳 天皇 ●藤原 順子 ●藤原 沢子 ○光孝 天皇		○藤原 鎌足(不比等?) ○藤原 長良 ●藤原 乙春 ○藤原 良房 ●源 潔姫 ○仲野 親王 宇多外祖父 ●当宗 氏 宇多外祖母 ●藤原 基経 宇多后父	
891 寛平3 12.16	宇多				
	源融				
日本紀略		×			

陵墓数					
年月日	天皇	近 陵		近 墓	
典拠	執政				
十陵八墓		○藤原 胤子 醍醐母 ○光孝 天皇 ●藤原 沢子 ○文徳 天皇 ○仁明 天皇 ○崇道 天皇 ●藤原乙牟漏 天皇 ○桓武 天皇 ○光仁 天皇 ○天智 天皇		○藤原 基経 醍醐養母ノ父 ●当宗 氏 ○仲野 親王 ●源 潔姫 ○藤原 良房 ○藤原 乙春 ○藤原 長良 ○藤原 鎌足(不比等?)	
897 寛平9 12. 8	醍醐 時平			×	
日本紀略					
十陵八墓		●藤原 胤子 ○光孝 天皇 ●藤原 沢子 ○文徳 天皇 ○仁明 天皇 ○崇道 天皇 ●藤原乙牟漏 天皇 ○桓武 天皇 ○光仁 天皇 ○天智 天皇		○藤原 高藤 醍醐外祖父 ○藤原 基経 ●当宗 氏 ○仲野 親王 ●源 潔姫 ○藤原 良房 ○藤原 長良 ○藤原 鎌足(不比等?)	
900 昌泰3 12. ?	醍醐 時平			×	
(推 定)					
十陵八墓		●藤原 胤子 ○光孝 天皇 ●藤原 沢子 ○文徳 天皇 ○仁明 天皇 ○崇道 天皇 ●藤原乙牟漏 天皇 ○桓武 天皇 ○光仁 天皇 ○天智 天皇		○宮道 列子 醍醐外祖母 ○藤原 高藤 ○藤原 基経 ●当宗 氏 ○仲野 親王 ●源 潔姫 ○藤原 良房 ○藤原 鎌足(不比等?)	
907 延喜7 12. 21	醍醐 時平				
西宮記裏書					
十陵八墓		●藤原 胤子 ○光孝 天皇 ●藤原 沢子 ○文徳 天皇 ○仁明 天皇 ○崇道 天皇 ●藤原乙牟漏 天皇 ○桓武 天皇 ○光仁 天皇 ○天智 天皇		●宮道 列子 ○藤原 高藤 ○藤原 基経 ●当宗 氏 ○仲野 親王 ●源 潔姫 ○藤原 良房 ○藤原 鎌足(不比等?)	
927 延長5 12. 26	醍醐 忠平			×	
延喜式 (中務省式)		×			

陵墓数			
年月日	天皇	近	墓
典拠	執政		
十陵八墓			
930 延長8 12.9	朱雀 忠平	◎醍醐 天皇 ●藤原 胤子 ○光孝 天皇 ●藤原 汎子 ○仁明 天皇 ○崇道 天皇 ●藤原乙牟漏 ○桓武 天皇 ○光仁 天皇 ○天智 天皇	●操子 女王 ●宮道 列子 ○藤原 高藤 ○藤原 基経 ●当宗 氏 ○仲野 親王 ○藤原 良房 ○藤原 鎌足(不比等?)
政事要略 別聚符宣抄			
十陵九墓			
949 天曆3 12.23	村上 実頼	○醍醐 天皇 ●藤原 胤子 ○光孝 天皇 ●藤原 汎子 ○仁明 天皇 ○崇道 天皇 ●藤原乙牟漏 ○桓武 天皇 ○光仁 天皇 ○天智 天皇	◎藤原 忠平 ●操子 女王 ●宮道 列子 ○藤原 高藤 ○藤原 基経 ●当宗 氏 ○仲野 親王 ○藤原 良房 ○藤原 鎌足(不比等?)
九 曆 政事要略		×	
十陵九墓			
954 天曆8 12.16	村上 実頼	◎藤原 穩子 ○醍醐 天皇 ●藤原 胤子 ○光孝 天皇 ○仁明 天皇 ○崇道 天皇 ●藤原乙牟漏 ○桓武 天皇 ○光仁 天皇 ○天智 天皇	○藤原 忠平 ●操子 女王 ●宮道 列子 ○藤原 高藤 ○藤原 基経 ●当宗 氏 ○仲野 親王 ○藤原 良房 ○藤原 鎌足(不比等?)
西宮記裏書		×	
十陵九墓			
964 康保元 12.22	村上 実頼	◎藤原 安子 ●藤原 穩子 ○醍醐 天皇 ●藤原 胤子 ○光孝 天皇 ○仁明 天皇 ○崇道 天皇 ○桓武 天皇 ○光仁 天皇 ○天智 天皇	○藤原 忠平 ●操子 女王 ●宮道 列子 ○藤原 高藤 ○藤原 基経 ●当宗 氏 ○仲野 親王 ○藤原 良房 ○藤原 鎌足(不比等?)
政事要略		村上后父 醍醐皇太子外祖父	

陵墓数		近 陵										近 墓									
年月日	天皇																				
典拠	執政																				
十陵十墓		○天智 天皇	○光仁 天皇	○桓武 天皇	○崇道 天皇	○仁明 天皇	○光孝 天皇	●藤原 胤子	○醍醐 天皇	●藤原 穩子	●藤原 安子 冷泉円融母										
970 天禄元 12.	円融																				
伊尹																					
政事要略		×																			
十陵十一墓		○天智 天皇	○光仁 天皇	○桓武 天皇	○崇道 天皇	○仁明 天皇	○光孝 天皇	○醍醐 天皇	●藤原 穩子	●藤原 安子	○藤原 懷子 花山母										
985 寛和元 12.	花山																				
頼忠																					
日本紀略 (推定)												×									
十陵？墓		○天智 天皇	○光仁 天皇	○桓武 天皇	○崇道 天皇	○仁明 天皇	○光孝 天皇	○醍醐 天皇	●藤原 穩子	●藤原 安子	○藤原 超子 三条母										
1011 寛弘8 12.27	三条																				
道長																					
日本紀略 小右記・権記												×									
十陵？墓		○天智 天皇	○光仁 天皇	○桓武 天皇	○崇道 天皇	○仁明 天皇	○光孝 天皇	○醍醐 天皇	●藤原 穩子	●藤原 安子	○藤原 嬉子 後冷泉母										
1045 寛徳2 12.13	後冷泉																				
頼通																					
中右記												×									

陵墓数													
年月日	天皇	近陵										近墓	
典拠	執政												
十陵？墓		○天智	○光仁	○桓武	○崇道	○仁明	○光孝	○醍醐	●藤原	●藤原	◎藤原		
1075 承保2 5.24	白河	天皇	天皇	天皇	天皇	天皇	天皇	天皇	穩子	安子	茂子		
	教通										白河母		
百鍊抄 江家次第		×											
十陵？墓		○天智	○光仁	○桓武	○崇道	○仁明	○光孝	○醍醐	●藤原	●藤原	◎藤原		
1108 天仁元 7.7	鳥羽	天皇	天皇	天皇	天皇	天皇	天皇	天皇	安子	茂子	莢子		
	忠実										鳥羽母		
殿曆		×											
十陵？墓		○天智	○光仁	○桓武	○崇道	○仁明	○光孝	○醍醐	●藤原	●藤原	◎藤原		
1159 平治元 6.24	二条	天皇	天皇	天皇	天皇	天皇	天皇	天皇	茂子	莢子	懿子		
	基実										二条母		
百鍊抄 師光年中行事													